

## チリップの思い出

岡部牧夫 (当基金評議員・ナチュラリスト)

釧路と根室のあいだに尾瀬ヶ原の三倍ほどの霧多布<sup>きりたっぶ</sup>の大湿原がある。その名はいまではかなり有名だろう。しかしその東にひっそりと展開しているチリップの湿原や沼は、まだ一般にはさほどひろまっていない。自然保護助成基金は、これらの湿原群を買いとって保護しようというNPO法人、霧多布湿原トラストの活動に協力している。一九六七年の夏にそのあたりを克明に歩き、地形、生物相、景観の全体にふかい感銘をうけた私としては、我が意を得た選択だった。

チリップはチュルブとも訓じ、もちろんアイヌ語起源の地名だが、私は意味をつまびらかにしない。国土地理院は「散布」をあてている。細かくいうと、ヒチリップ(火散布)、モチリップ(藻散布)、ワタラチリップ(渡散布)などの集落があり、それぞれ同じ名の沼に沿っている。なかで大きいのはヒチリップ沼<sup>とつ</sup>で、尾瀬沼の倍ちかい。ちなみに、沼を「とう」と読ませる例は北海道にはすくなくないようだ。

当時は霧多布からヒチリップまで、東邦交通のバスが日に二、三本あった。いまは釧路から霧多布温泉行きのバスが十数本も出ていて、モチリップやヒチリップはその沿線にあたる。まだ温泉などのない霧多布に二泊した八月一八日の朝、妻と私はどんより曇ってうすら寒い九時半のバスに乗った。砂州でつながった島に立地する霧多布市街を本土側にもどったところが、湿原に浮かぶような新川の集落である。それから琵琶瀬にかけての四キロは、霧多布湿原の眺めがとりわけ美しい。花々が咲き競い、鳥が飛びかい、川や池塘が散在して光る低平地の茫漠……。美しくても、容易に中には踏みこめないのがよい。

琵琶瀬で海岸の断崖に並行した丘陵に登ると、湿原のなかに一番沢をはじめさらに多くの水面がやや遠くちらちら見える。だがこの道道霧多布厚岸線<sup>どうどう</sup>は、間も

なく鬱蒼たる針広混交の防霧林に包まれ、湿原は見えなくなる。しばらくすると海岸のワタラチリップに降り、また登って五、六分、三叉路という停留所で道道をはなれ、ヒチリップにくだり着いた。霧多布からちようど三十分である。

停留所はチリップ漁組前。内地で漁協というのを、こっちは「ぎょそ」と呼ぶらしい。時間はたっぷりあるので、まず丸山のほうに行ってみる。ヒチリップ沼の南西岸の集落である。このへんの夏は昆布漁の最盛期で、ここでもあたり一面に今朝とった昆布をほしている。しかし空の雲は厚く、晴れそうもない。ゴメ(カモメ類の通称)がしきりに飛ぶ。いまの季節だからほとんどは海猫だが、まれにオオセグロカモメがまじる。それにしてもヒチリップ沼の大きな茫洋をなんと言おう。

パンと果物を買ひ、海岸に出て堤防の陰で風をよけ、茶内に行くバスまでの数時間をすごした。砂地の花たちもたいがい終わり、海風にゆられてひと夏の挽歌を口ずさんでいる。

時間になり、チリップ漁組が経営するマイクロバスが来た。三叉路からワタラチリップを往復し、そのあとは道道を北上する。左手の樹間にヒチリップ沼がずっと見えている。それもとうとう終わり、六番沢に来ると行く手に雪印のたかい煙突が見えはじめ、やがて終点の茶内市街に着いた。ヒチリップから一時間あまり、百二十円の楽しい旅だった。

いまあらためて地図を見なおすと、北海道の東部には湿原がじつに多い。なかで釧路湿原や霧多布湿原は有名だが、厚岸湖にそそぐ別寒辺牛川<sup>べかんべうし</sup>、風蓮湖の風連川などは源流から川口まですべて湿原のなかを流れている。それらもひろく保護してゆきたいものである。

# 平成21年度 助成事業報告（見込み）

平成21年度の助成総額（予算）4,100万円

●共同助成事業

I. P.N.ファンド	（財）日本自然保護協会との公募助成	20件	1,985万円
II. ナショナル・トラスト	（社）日本ナショナル・トラスト協会との公募助成	5件	1,000万円

●自主助成事業

III. 直接助成（当基金が緊急且つ重要と認める自然保護に資する各種助成）		4件	475万円
		未定	625万円

\*上記Ⅰ～Ⅲの内容は下記

■助成内容（助成先・テーマ）（未定分含まず） 助成額

I P.N.ファンド第20期（平成21年度）助成（明細次頁） 1,985万円

II ナショナル・トラスト活動助成

① NPO法人 ツシマヤマネコを守る会			
・対馬市上県町佐護西里瀬内の土地取得（ツシマヤマネコの生息密度が高い地区）（予定）		800万円	
② NPO法人 阿蘇花野協会（阿蘇の草原）（4年目継続）			
・ナショナル・トラスト維持・管理費		50万円	
③ 財団法人 阿蘇グリーンストック（阿蘇の草原）（3年目継続）			
・ナショナル・トラスト維持・管理費		50万円	
④ 社団法人 生態系トラスト協会（ヤイロチョウの森）（3年目継続）			
・ナショナル・トラスト維持・管理費		50万円	
⑤ NPO法人 霧多布湿原トラスト（霧多布湿原と水源の森）（2年目継続）			
・ナショナル・トラスト維持・管理費		50万円	

III 緊急且つ重要な直接助成

① 船浮ヤマネコ調査グループ（調査・研究）			
・西表・船浮におけるイリオモテヤマネコ分布調査		135万円	
② 日本アルプス雷鳥研究会（調査・研究）			
・日本アルプスにおけるライチョウの生息状況と生息数に関する調査 【2009年度南アルプス仙丈岳・甲斐駒ヶ岳、火打山調査】		50万円	
③ 南アルプス食害対策協議会（調査・研究）			
・ニホンジカによる食害が深刻な南アルプス北部における被害実態調査と 高山植物等の緊急保護（長野県側）		210万円	
④ 南アルプス高山植物保護ボランティアネットワーク（活動）			
・南アルプスにおける高山植物のニホンジカ食害対策（静岡県側）		80万円	



## 2009年度（第20期）プロ・ナトゥーラ・ファンド決定先一覧

### ■国内研究助成 11件 小計1,211万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	決定額
1	有明海奥部・諫早湾における海底堆積物の変化と諫早湾干拓事業の影響	有明海環境生態調査・研究プロジェクト	堤 裕昭 (熊本県立大学環境共生学部 教授)	100	95
2	群馬県玉原湿原の保全に関する研究	玉原湿原保全プロジェクト	福嶋 司 (東京農工大学大学院 教授)	95	95
3	砂防堰堤撤去による溪流植生復元のためのモニタリングおよび回復評価手法の開発	赤谷溪流生態研究会	吉川 正人 (東京農工大学 助教)	66	66
4	南アルプス高山生態系の保全を目的としたニホンジカの生態学的研究	信州大学ニホンジカ研究チーム	泉山 茂之 (信州大学農学部 准教授)	196	196
5	奄美群島における絶滅危惧植物の生育地調査と保全遺伝学的研究	奄美希少生物調査隊	宮本 旬子 (鹿児島大学大学院理工学研究科 准教授)	100	100
6	奄美大島におけるイシカワガエルの生活史を通じた行動圏と利用環境の解明	奄美両生類研究会	岩井 紀子 (独立行政法人・森林総合研究所 特別研究員)	111	111
7	サンバ( <i>Butastur indicus</i> )の狩場環境の創出にむけた草刈りや杭の設置の保全的効果の検証	岩手大学農村生態系再生研究会	東 淳樹 (岩手大学農学部 講師)	99	99
8	三浦半島沿岸のカムリウミスズメ保全のための調査(継続)	城ヶ島沖の海鳥観察グループ	宮脇 佳郎 (城ヶ島沖の海鳥観察グループ 代表)	129	129
9	海洋島における外来アリの分布パターンの経時変化と在来鳥類群集への影響評価	南大東生態系保全グループ	大西 一志 (琉球大学農学部 科研費研究員)	125	125
10	宝蔵寺沼ムジナモ自生地の生育環境把握と改善のための水質調査	羽生市ムジナモ保存会	中野 忠男 (羽生市ムジナモ保存会 会長)	95	95
11	国立公園特別保護地区上高地における地形変化と植生動態を許容した自然景観保全に関する基礎研究	上高地自然史研究会	川西 基博 (立正大学地球環境科学研究科ORC ポストドクター)	100	100

### ■国内活動助成 7件 小計568万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	決定額
1	日本におけるユネスコ「人と生物圏」計画の普及と「生物圏保存地域」の登録・活用	日本MAB計画委員会	酒井 暁子 (横浜国立大学大学院環境情報研究院 助教)	58	58
2	地域連携による生態学教育プログラム「人と自然と生態学」2(継続)	岩手生態学ネットワーク (Ecology in Iwate Network: EINET)	松政 正俊 (岩手医科大学共通教育センター・生物 教授)	40	40
3	野生動物レスキュー&リハビリ・ボランティア養成	野生動物保護施設ネットワーク	森田 正治 (NPO法人 道東野生動物保護センター センター長)	36	36
4	普及・啓発・提言事業 湿地の生物多様性～ラムサールCOP10からCBD-COP10へ～	ラムサール・ネットワーク日本	浅野 正富 (ラムサール・ネットワーク日本 事務局長)	233	150
5	野尻湖における水草帯の復元と保全手法に関する検討	野尻湖水草復元研究会	山川 篤行 (自営業・旅館 芙蓉荘 代表)	97	97
6	南大東島の環境保全のための啓蒙活動	ダイトウコノハズク保全研究グループ	高木 昌興 (大阪市立大学大学院理学研究科 准教授)	87	87
7	サハリン石油・ガス開発の環境影響における自然環境・野生生物保護のための調査・提言・啓発活動	国際環境 NGO FoE Japan	ランダル ヘルテン (国際環境NGO FoE Japan 代表理事)	100	100

### ■海外助成 2件 小計206万円

(万円)

No.	テーマ	申請者名	推薦者名	申請額	決定額
1	ネパール、アンナプルナ保護区ムスタン地区におけるユキヒョウ( <i>Uncia uncia</i> )の保護活動	Achyut Aryal	幸島 司郎 (京都大学野生動物研究センター 教授)	100	100
2	ロシア・アムール地域のムラヴィオフカ自然保護区内におけるツル類・コウノトリの繁殖地に野火が及ぼす影響を抑制するための、研究に基づいた技術の開発とその実行	Sergei M. Smirenski	百瀬 邦和 (NPO法人 タンチョウ保護研究グループ 理事長)	106	106

P.N. ファンド助成金総額 合計 20件 1,985万円



琵琶瀬展望台から見た霧多布湿原

## 認定NPO法人 霧多布湿原トラスト

所在地：北海道厚岸郡浜中町藻散布・厚岸町登喜岱 原野95.5ヘクタール  
助成金額：579万円

霧多布湿原は、釧路・サロベツ・別寒辺牛湿原に次ぐ大きな湿原ですが、霧多布湿原トラストはこの湿原の保全を目指して2000年に設立された保護団体です。現在まで3000ヘクタールの湿原のうち、1割強の約350ヘクタールを保有管理するほか、浜中町町営の霧多布湿原センターの運営をも請け負っています。

このトラストに昨年、農水省の指導で解散することとなった藻散布農協から、その保有地約96ヘクタールを譲渡したいとの話があり、本助成制度の利用申請となりました。

対象地は霧多布湿原には含まれないものの、隣接してラムサール条約登録湿地となっており、タンチョウ



藻散布川の谷底平野に広がる湿原

も飛来する藻散布沼の水源地であり、蛇行する藻散布川を囲む広大な湿原です。道有林の丘陵地に囲まれ、ほとんど人手も加わらず、学術調査も行われたこともない、北海道の原風景を思わせる秘境といえましょう。

この貴重な湿原を破格な値段で譲られたのは、解散した農協の組合員が実は漁協の組合員でもあり、組合が藻散布沼で養殖するハマグリ大の大アサリの大事な水源を失いたくないために、大切に水源地を護ってくれるであろう湿原トラストに譲渡を決めたのでした。

いま湿原トラストでは、この地で専門家の調査を行ったうえ、どのように保全利用すべきかを検討することになっています。



藻散布沼南西端から藻散布川上流方向を望む

# NPO法人 エンハンスネイチャー荒川・江川

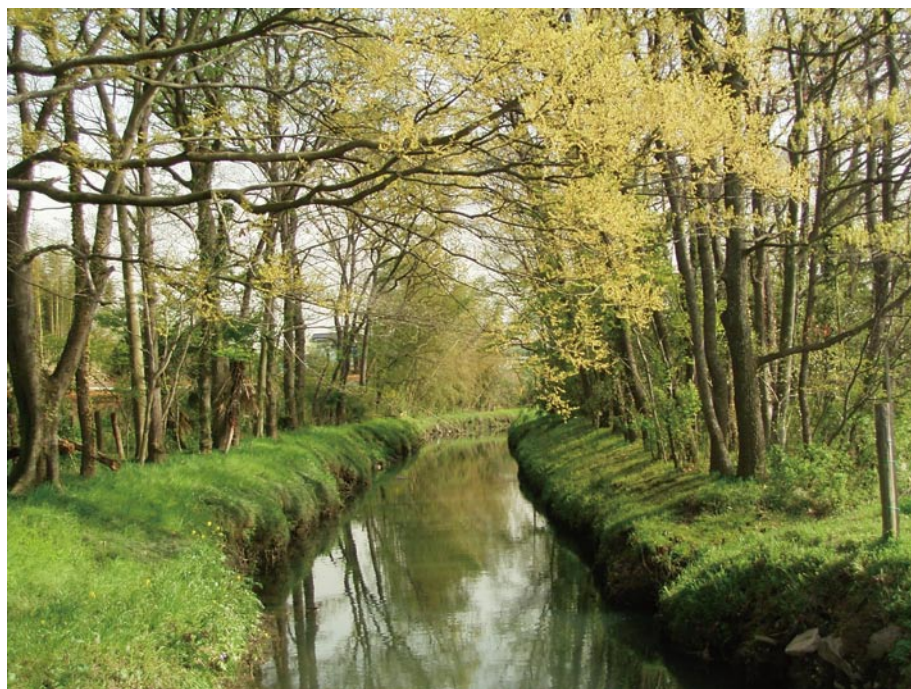
所在地：埼玉県桶川市川田谷 原野 1,205m<sup>2</sup>

助成金額：783万円

埼玉県上尾市と桶川市の境に、荒川の支流といっても本当に小川というしかない江川が流れています。周辺は都市化が進み、北本市から流れ出す川は町中を通過して、水は黒く濁り、お世辞にも清流とはいえません。

この江川が荒川本流に注ぐ手前に、川に沿って数百メートルほどの疎林のある細長い河畔の湿地・氾濫原の草地が伸びています。僅かに開発から取り残された土地です。この一見ありふれた「原っぱ」のような土地が、荒川流域でも少なくなったサクラソウの自生地であることから、地元の有志がその保全に乗り出し、サクラソウネットワークとして活動を始めました。と

ころが詳しく調査したところ、この地がとんでもない貴重な場所であることがわかりました。全国で湿地の減少に伴い急速に生息地が失われて絶滅の恐れがあり、レッドデータブックに掲載されている数多くの種が、ここに残っているのです。ノウルシ、チョウジソウ、オオアブノメ、ミズニラ、ヌカボタデ、ヤナギヌカボ、ノカラマツ、ハナムグラ、シムラニンジン、エキサイゼリなど、とりわけサワトラノオは全国的にも希少な種で、国のRDBでも埼玉県は絶滅とされていましたが、ここでは群生しており全国一の自生地とみられます。



荒川合流点近くの江川の河畔林

サクラソウネットワークは、埼玉県生態系保護協会の指導の下に、NPO法人エンハンスネイチャー荒川・江川を立ち上げて、この地の地主と湿地を埋めないという土地保全協定を取り交わしてきたのですが、この土地を国道上尾道路が横切る計画があり、それを変更してもらうためにも、自前の土地をトラスト地として持ちたいと購入・借地を拡大しており、今回ナショナル・トラスト活動助成を利用することとなりました。



トラスト地ではエンハンスネイチャー荒川・江川により草刈りが行われている



トラスト地に咲くノウルシ

# 危機に瀕する 日本の高山の自然と雷鳥

中村浩志（信州大学教授）



日本の長い歴史の中で、現在日本の自然が危機に瀕している。増えすぎたニホンジカ、ニホンカモシカ、ニホンザル、ツキノワグマ、イノシシといった大形草食動物が、日本各地の豊かな自然を破壊しつつそうとしているからである。本州中部では、この問題が顕著になって来たのはごく最近のことである。これらの野生動物は、以前は低山に棲んでいたが、最近では里や里山といった人里環境に侵入し、そこで数を増加させた結果、人との間でさまざまなトラブルを起すことになった。その結果、狩猟による個体数調節が実施され、それがこれらの野生動物の分布拡大をさらに助長させることになった。分布を拡大し新たな場所で餌を得ることで、そこでさらに数を増やしたため、現在も数の増加が続いている。この分布拡大は、平面的、垂直的の双方で起こっている。南アルプスでは、今から15年ほど前、シカの食害は里山から低山帯上部にあたる広河原付近（1550 m）までに限られていたが、その後亜高山帯、さらには高山帯に拡大し、現在では北岳（3192 m）山頂のお花畑に及んでいる。この10年間に南アルプス亜高山帯のお花畑の殆どが失われ、トリカブト、バイケイソウ、マルバダケブキといった毒草のみの草原に変わった。また、各地の高山帯のお花畑もすでにシカの食害で失われている。さらに、食害にあった高山では、現在土砂の流失が始まっている。高山の急斜面の土砂流失を押さえているのが植生であり、それが食害によって失われたからである。

最近、高山に侵入したのはシカだけではない。最初に高山に侵入したのはニホンザルで、ニホンジカ、ツキノワグマがそれに続き、ここ数年はイノシシまでが高山に侵入を始めている。なぜ、本来低山に生息するこれらの動物がこの10年間に高山に侵入するようになったのであろうか。その理由には、開発、過疎化、狩猟圧の減少、地球温暖化、さらには野生動物が人を

恐れなくなったことなど、近年の我々の生活変化と密接に関係したさまざまな要因が直接・間接に関係している。

私は、鳥の研究の関係からこれまで多くの国を訪れ、さまざまな国の文化や自然に接する機会を持った。多くの国を訪れて気づいたことの一つは、人を恐れないのは日本のライチョウだけであることだ。なぜ、日本のライチョウだけが人を恐れないのか？その理由を突き詰めると、日本文化が関係することがわかった。稲作文化を基本にした日本では、高い山には神が宿するという山岳信仰が古くからあり、里と里山は人の領域、奥山は神の領域として使い分けてきた歴史がある。そのため、奥山の最も奥に棲むライチョウは神の鳥とされ、捕えてたべることがなかった。だから、日本のライチョウは人を恐れない。それに対し、牧畜文化を基本とする欧米では、森を伐採し牧場がつくられ、高山まで家畜が上げられ、平地から高山までが人の領域となってきた歴史があり、今でも多くの地域でライチョウは狩猟鳥となっている。神の領域とされた日本の奥山には、今でも手つかずの高山環境、亜高山帯針葉樹林、さらにはブナの森などを残している。こんな国は、世界全体から見ると極めてまれだということも知った。

世界の最南端に分布する日本ライチョウとその生息環境である日本の高山の自然は、共に世界全体から見ると極めて貴重な遺産である。それら貴重な遺産を今日まで残したのは、山岳信仰に代表される日本人の信仰心であり、日本文化であったといえるであろう。しかし、それらの貴重な遺産も増えすぎた野生動物の侵入、地球温暖化等により、現在危機的な状況にある。危機を招いた原因は、便利で豊かな我々の生活が深く関わっている。真の豊かさとは何か？氷河期から生き続けて来た物言わぬライチョウが我々に語りかけることに謙虚に耳を傾けることが、今こそ必要であろう。

# 再びシカの食害について

昨年の「PNニュース」で高山・亜高山帯でのシカの食害（過食圧）について取り上げたが、この問題はいまだ解決策が見えておらず、食害は拡大の一途をたどっているのが現状である。当基金では、全国の都道府県にアンケートを送付して、被害状況や対策を調査し、30の道府県からの回答を得た。その結果と、助成先や環境省から得た情報を併せて、「高山・山地におけるシカ過食圧問題への対策事例」という小冊子にまとめ、関係各方面に配布した。少しでも情報を共有してこの問題への取り組みを前進させたいという願いからである。

今までの対策と昨年度の助成の結果から、多少わかってきたことの幾つかを紹介すると、まず防鹿柵の設置では、いろいろ批判はあるものの、植生の回復に、確かな手ごたえはあるという結果が出始めている。南アルプスの聖平では、しばらく絶えていたニッコウキスゲが開花するなど、各地で柵内の植生の復活が報告されている。しかし裸地化してしまった場所の植生の再生は困難であり、さらに高茎草原がマルバダケブキ一色に変化してしまったお花畑の復元は相当困難とみられているなど問題も多い。

またシカの行動については従来捕捉が困難な状況であったが、信州大チームの、最新型GPS付テレメトリ利用の調査により、その行動がしだいに明らかになりつつある。たとえばある個体は尾根筋を長く移動するかと思えば、他の個体は同一の地域に留まるなど、

同じ場所に群れていても、行動はばらばらのようだ。中には冬期も麓に下りず、亜高山帯で越冬する個体もいるという。そして移動し、あるいは滞留するシカたちにとって、重要な食物となるのが、林道の法面に植えられた冬季にも枯れない外来の植物であることもわかってきた。

当基金の本件関連の今年度助成は次のとおり。

- ①ニホンジカによる食害が深刻な南アルプス北部における被害実態調査と高山植物等の緊急保護  
南アルプス食害対策協議会（長野県） 210万円
- ②南アルプスにおける高山植物のニホンジカ食害対策  
南アルプス高山植物保護ボランティアネットワーク（静岡県） 80万円
- ③南アルプス高山生態系の保全を目的としたニホンジカの生態学的研究  
信州大学ニホンジカ研究チーム 196万円

なお上記当基金作成の小冊子は少数残部がありますので、ご必要な向きは当基金事務局・目代までお問い合わせ下さい。また、<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/shika2009.pdf>からダウンロードもできます。（岡本寛志）



南アルプス高山植物保護ボランティアネットワークによる茶臼岳における防鹿柵設置の様子（2008年9月）



南アルプス食害対策協議会による仙丈ヶ岳馬の背における防鹿柵設置の様子（2008年8月）。写真はいずれも鷗飼一博氏撮影

## 西表・舟浮における イリオモテヤマネコ分布調査

助成先：船浮ヤマネコ調査グループ  
助成金額：135万円

西表島に生息するイリオモテヤマネコは100頭前後と推定されていますが、現実には人のまったく入らぬ地域もあり、正確な生息数も分布もわかっていません。とくに西部の舟浮は、他の地域からは船でしか行かない陸の孤島といわれていますが、イリオモテヤマネコの発見地でもあります。いまこの地にトゥドゥマリ浜でホテルを建設したユ

ニマットの開発の手が伸びようとしており、保護派の人々が憂慮しています。

そこで改めてこの地の重要性を再認識するために、琉球大学の高相徳志郎教授のグループが舟浮地区でヤマネコの生息調査を行っています。調査の主役を西表の自然を知り尽くしている写真家横塚真己人氏に委嘱しており、一回目の調査では糞を採集し、鳴き声を確認しました。次の12月の調査では、自動撮影装置でヤマネコを捉えることが期待されます。ひょっとすると、地元で何人もの人が確かに見たというイリオモテヤマネコよりひと回り大型のヤマビカリヤー（オオヤマネコ？）が写るかも知れませんね。

### 平成20年度決算ならびに 平成21年度予算

当基金では平成21年5月15日に平成21年度理事会および評議員会を開催し、平成20年度の事業報告、決算報告及び平成21年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は右表の通りです。

### 第15回 プロ・ナトゥーラ・ ファンド助成成果発表会

- 日時：2009年12月12日（土）  
9:55～16:35（終了後懇親会）
  - 場所：渋谷サンスカイルーム  
TEL 03-3406-2085  
渋谷区渋谷1-9-8  
朝日生命宮益坂ビル4階
  - 主催：（財）自然保護助成基金  
（財）日本自然保護協会
  - 参加費：無料（どなたでもお気軽にご参加下さい）
  - お申し込み：直接会場へお越し下さい。  
途中参加も可能です。
- ※詳細はホームページ（<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>）をご参照下さい。

### 平成20年度決算ならびに平成21年度予算

（単位：円）

項 目	平成20年度		平成21年度
	予 算	決 算	予 算
<b>(収入の部)</b>			
基本財産運用収入	39,000,000	39,668,162	33,000,000
運用財産運用収入	300,000	349,004	100,000
雑収入	0	151,667	0
事業実施積立預金取崩収入	9,000,000	9,000,000	41,000,000
収入合計	48,300,000	49,168,833	74,100,000
<b>(支出の部)</b>			
事業費	84,000,000	81,962,116	48,000,000
P.N.ファンド公募助成	(26,000,000)	(26,120,000)	(20,000,000)
ナショナル・トラスト活動助成	(19,000,000)	(18,705,500)	(10,000,000)
有力保護団体助成	(12,000,000)	(12,000,000)	(0)
緊急且重要な直接助成	(20,000,000)	(19,175,000)	(11,000,000)
事業管理費	(7,000,000)	(5,961,616)	(7,000,000)
管理費等	22,500,000	21,371,904	22,650,000
特定預金支出	400,000	400,000	400,000
予備費	300,000	0	300,000
支出合計	107,200,000	103,734,020	71,350,000
前期繰越収支差額	58,903,910	58,903,910	4,338,723
次期繰越収支差額	3,910	4,338,723	7,088,723

### 編 集 後 記

何やかやと世の中いろいろ問題はありますが、それに関わらず歳末はやってきます。今年が一番の災害は静岡の地震でした。やはり地球は怒っているのだと思います。でも逆に良いこともありました。どう考えても自然を破壊するのみでなく無駄な経費を使用するとみなされる、ダムや高速道路の建設が見直される傾向になったことです。やっと我々の反対の声が届いたと喜ぶべきことだと思います。反対に悪いことは、気候の温暖化による鹿の高山植物の食害です。自然の中の華というべき高山植物が全く山から消えてしまったら、山に登る人々の気持ちもいやされず、人間としての優しさに欠けた人達が増えるのではないかと心配です。鹿に限らず動物と人間が自然の中で上手く共存できる方法を考えなくてはなりません。例年の決まり文句、来年こそは良い年になりますようにと申し上げて今年の締めくくりと致します。（岡本和子記）

### Pro Natura ニュース 第19号

発行者：財団法人 自然保護助成基金  
発行日：平成21年11月25日

〒150-0046  
東京都渋谷区松濤1-25-8  
松涛アネックス 2階  
TEL：03-5454-1789  
FAX：03-5454-2838  
E-mail：pro-natura@muj.biglobe.ne.jp  
<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>